

分科会5B

## 読み聞かせ講座

### (B) 大きい子向け

たのしいおはなし会をもつために  
～子ども読書活動交流集会（実技編）～

講師：大井 むつみ（東京家政大学）

第5分科会Bでは、大きい子向けに読み聞かせを行っている方を対象として講座を開催し、読み聞かせを行う上でのスタンスや選書の大切さなどご講義をいただいた。

また講師の方、スタッフのそよかぜ文庫(越谷市)の方による読み聞かせ実演も行われた。

#### 1, はじめに

・読み聞かせの講座にはスキルアップを求めて参加される方もいらっしゃると思うが、まずスキルの前にスタンスを確認したい。どういう気持ちで子どもに向かい合うかを考えていただきたい。

・また、読み聞かせは、まずは絵本を読んでもらって楽しさを味わうことが絶対に必要である。良き聞き手になることが良き読み手になることにつながる。読んでもらって楽しむという感触を十分に味わっていただきたい。

#### 2, ロールプレイング「おっとあぶないーこんな思い違いをしていませんか？」

・「おっとあぶない」=思い違いをしたままで行われている読み聞かせについて、そよかぜ文庫の方々によるロールプレイングを通して紹介していただいた。事例として次のようなものが挙げた。

- ・絵本の選び方（持ちやすいから小さい絵本にしよう、「〇〇賞受賞」の本がいい、といった理由で本を選んでしまう）
- ・読み方（子どもが笑ってくれるようにと、

演技たっぷりに本を読んでしまう）

- ・絵本の複製（絵本が小さいからと許可無く大きくしたり、紙芝居などを作ってしまう）
- ・選び方、読み方など、基礎的なことは仲間内でもきちんと言い合えるようにしたい。

#### 3, 子どもの読書環境について

・今の子どもは本を読まなくなったと言われているが、本当にそうか。次に挙げる読書環境を満たしているか。

- ・子どもに安全に行かせられるところに図書館があるか。交通量の多い通りを越えた場所などではなく、近くに公共図書館があるか。
- ・そこは迎えてくれる魅力的な棚も職員も予算もある図書館か。
- ・そういった図書館が無い場合、声をあげて要望を出しているか。
- ・学校の図書館が充実しているか。専任・専門・正規の図書館員がいるか。
- ・周りの大人が夢中になって本を読んでいる姿を子どもに見せているか。
- ・手軽で刺激的な遊びばかり子どもの周りに与えていないか。それを作ったのは誰か。
- ・これらをクリアして、はじめて子どもが本を読まないといえる。今の子どもは本を読まないのではなく、読みにくい環境におかれているというほうが当たっている。

#### 4, 読み聞かせのスタンス

- ・読み聞かせを行おうとする人は、絵本と子どものどちらにも愛情を持っていることが大切である。絵本と子どもは車の両輪。片方だけでは前へ進まない。
- ・どちらにも愛情を持っている方なら、たいいの方に読み聞かせはできる。あとは基本を押さえて、よく選んでよく読んでよく練習してから子ども達の前に立つこと。よく選ん

でよく練習してあるということは、子どもに対する愛情であり誠意である。

- ・まずは読んでもらってたくさん楽しむことが大切である。よき聞き手はよき読み手になる。読んでくれる、聞いてくれる仲間とともに楽しみたい。

- ・読んでやる、聞かせてやる、感動させてやるという読み聞かせは存在しない。これかと思う1冊を子ども達に聞いてもらうことが読み聞かせである。また読み聞かせは読みっぱなしが大原則。その1冊をどう受け止めるかは子どもの自由である。

- ・子どもが本を好きになる度合いはまちまちでよい。本を読むよりも夢中になることが見つかる子もいる。ただ、子どものこれからの人生の中で、読むという手軽な楽しみを知らないままではいけない。一つの楽しみとして教えてあげられるとよい。

- ・絵本を読み終わったら子どもに対する視点がないのではいけない。新聞を読むなど、これから子どもが育っていく世の中を気にかけることも大切である。

- ・幼い子のものと考えずに大きい子にも読んでといわれたら読んでやる。絵本は読んでもらってこそ。良い絵本は年齢に関係なく楽しめる。

## 5, 選書の大切さ

- ・選書眼を持って本を選んでいるか。人生経験の少ない子どもたちを、ちょっとしたくすぐりやおもねりで喜ばせるような本も出ている。よく選ぶことが大切である。

- ・選書眼は一朝一夕にはできない。大人としてどういう読書をしてきたか、どういう言葉を内包しているかが問われる。選書眼を養う努力を忘れずに。

- ・子どもの感性に沿った本選びをする。ベーシックといわれる読みつがれている本を読んでもみると、時代を越え国を越え愛されてきた本の魅力がわかる。子どもの感性には戻れな

いが、読みつがれてきた本は子どもの感性を押し量る手助けをしてくれる。

- ・子どもにとって楽しい思い出として残るような本を選びたい。また昔話の良い作品は読み手を選ばず薦められる。昔話は話自体に力がある。子どもでも無理なくついていける展開になっているし、実に様々な登場人物に出会うことができる。

- ・ほかに絵本をチェックするポイントとして、良い絵・良いテキスト・良い余白でできているか、子どもにわかる言葉でストーリーが構築されているか等が挙げられる。また、ある程度の大きさがあるか、ストーリーの流れに不自然なところはないか等よく見極めること。

## 6, どう読むか

- ・パブリックな場で、不特定多数の異年齢集団を相手には好き勝手に読んではいけない。演技・声色は不要である。子どもの想像を膨らます邪魔をせず、すんなり、ゆっくり、自然に読むことが大事である。

## 7, なぜ今の時代に読み聞かせが広がっているのか

- ・現代の速い時間の流れの中で、子どもにちょうどよい早さで本をめくり読んで聞かせるという、ゆっくりとした時間の流れが評価されているのではないか。

- ・今の時代はけして子どもにとって生きやすい時代ではない。不条理な現実につづかって落ち込んだとき、力になってくれるのは、それまでに積み重ねられた明るい記憶や楽しい経験である。楽しかったという思いを積み重ねていくことで、厚みのある心の土台ができ、落ち込むことがあってもそれを跳ね返せる力になる。読み聞かせは、そういった経験・記憶の一つとして子どもの心に残るのではないか。